生姜・乾姜の修治法に関する史的考察

堂井 美里^{ab} 御影 雅幸^a

a 金沢大学大学院医薬保健学総合研究科資源生薬学研究室, 石川, 〒920-1192 金沢市角間町

b 株式会社ウチダ和漢薬, 東京, 〒116-8571 荒川区東日暮里4-4-10

Herbological Study on the Processing of Ginger

Misato DOUI^{ab} Masayuki MIKAGE^a

a Herbal Medicine and Natural Resources, Division of Pharmaceutical Sciences, Graduate School of Medical Science and Technology, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, Ishikawa 920-1192, Japan

b Uchida Wakanyaku Co., Ltd., 4-4-10 Higashi-nippori, Arakawa, Tokyo 116-8571, Japan

Abstract

Processing methods for the crude drugs *shokyo* (fresh ginger) and *kankyo* (dried ginger) have been different in China and Japan, although the reasons for this have not been clear. In this study, we revealed a historical transition in the processing methods for *shokyo* and *kankyo*.

We found that the name *shokyo* had been used for fresh ginger rhizome in China since the end of the Houhan dynasty. The name had also been used for *shokyo* in Japan, whereas the term *shokyo* was then applied to dried ginger in the Japanese pharmacopoeia during the Meiji era. With *kankyo*, on the other hand, several different processing methods existed in China. For example, ginger fermented in a ceramic pot after being soaked in running water and dried was called *kankyo*, and was strongly associated with the property 'hot'. However, we supposed that simply dried ginger, which has the property 'warm', came to be called as *kankyo* exclusively from the middle of the Qing dynasty. Meanwhile, only ginger dried with lime after being steamed was called *kankyo* in Japan. We also found that ginger whitened with lime was produced and sold in pharmacies because of a description by Shizhen Li, to the effect that "white ginger has higher quality". This controversial method has been changed to one without the use of lime since the Meiji era.

Key words : ginger (*shokyo*), *kankyo*, preparation, historical transition

要旨

漢方生薬「生姜」および「乾姜」の修治（加工）法は中国と日本で異なっているが、その理由は明確ではない。本研究では、両生薬の修治法の歴史的変遷を調査した結果、中国では後漢末期からショウガの新鮮根茎を生姜としてきたことが明らかになった。一方、日本でも新鮮根茎を生姜としてきたが、明治時代に日本薬局方に収載する際に、乾燥根茎を充てたことが明らかになった。また、中国では、地域により乾姜の調製法が異なっており、古い時代には「流水に浸した後、一度乾燥させ、陶磁器内で醸したものを」熱性が強い乾姜としていたが、清代中期には温性の乾燥根茎のみを使用するようになったと考察した。さらに、日本では「蒸した後、石灰を用いて乾燥させたもの」を独自に乾姜としていたが、李時珍が白色のものが良品と記したことから、石灰をまぶして白くしたものを薬舗で売り出し、その是非から明治時代以降、石灰を使用しない方法に代わったと判断した。

キーワード : 生姜, 乾姜, 修治, 歴史的変遷

緒言

ショウガの根茎に由来する生薬は『第16改正日本薬局方』¹⁾に修治の違いにより「生姜」「乾姜」の2種が収載されており、日本で修治品が利用される数少ない生薬である。しかし、日本と中国で両者の原材料であるショウガ根茎の加工方法や名称が異なっている。日本では、単に乾燥させた根茎を「生姜」、湯通しまたは蒸して乾燥させたものを「乾姜」とし

ているが、中国では新鮮根茎を「生姜」、乾燥根茎を「乾姜（簡体字では干姜）」²⁾としている（表1）。すなわち、日本の「生姜」は中国での「乾姜」と同様の調製法により得られたものであるが、両国で生薬名が異なる理由は不明である。また、一般に生姜は発表作用が強く、乾姜は温中作用が強いとされているが、如何に調製したものがそうした効果を示すのか明確ではなく、両生薬の薬効や来歴には不明な

表1 日本と中国における生姜・乾姜の相違

	日本 ¹⁾	中国 ²⁾
生姜	ショウガ <i>Zingiber officinale</i> Rosc.の乾燥根茎	ショウガ <i>Zingiber officinale</i> Rosc.の新鮮根茎
乾姜	ショウガ <i>Zingiber officinale</i> Rosc.の根茎を湯通し又は蒸して乾燥させたもの	ショウガ <i>Zingiber officinale</i> Rosc.の乾燥根茎

表2 中国の本草書中の生姜・乾姜・炮姜・黒姜に関する記載内容

年代	文献名	生姜 性味	修治法	乾姜 性味	修治法	炮姜 性味	黒姜 性味
漢	神農本草經 ⁴⁾ 名医別錄 ⁴⁾	辛 微温		辛 温 大熱			
齊 500前	神農本草經集注 ⁵⁷⁾	辛 微温		辛 温・大熱	凡作乾姜法 水淹三日畢 去皮置流水中六日 更去皮 然後晒干 置釜缸中 謂之醃也		
宋 1062	図經本草 ⁴⁾		生姜是常食物		漢州乾姜法: 以水淹姜三日, 去皮, 又置流水中六日, 更刮去皮, 然後暴之, 令乾, 醃於釜缸中, 三日乃成也 温州白乾姜一物漿水煮, 令透心潤湿, 取出焙乾		
蒙古 1248	湯液本草 ⁶⁾	辛 辛・甘 温 微温		大辛 辛 熱 大熱 温	水洗, 慢火炮		
元 1295	本草歌括 ⁵⁴⁾	辛 微温		辛 温・大熱	八九月採根於長流水洗過當日晒乾		
明 1520	本草約言 ⁵⁷⁾	辛 温		辛 大熱		苦 大温	苦 温
	1565 本草蒙筌 ⁷⁾	辛 微温	秋月採根。沙蔵常得新鮮	辛 温・大熱	去皮日曝, 又名乾姜。 漢州造乾姜法, 以水淹姜三日, 去皮, 又置流水中六日, 更刮去皮, 方曝乾, 醃於釜中三日乃成	苦	
	1578 本草彙明 ⁵²⁾	辛 温		辛 温・大熱	漢州乾姜温州乾姜色白亦好		
	1595 新鐫藥性會元 ⁵⁴⁾	辛 温		辛 温・大熱	取生薑汁淹三日去皮剝片晒乾置磁瓶中	苦	
	1596 本草綱目 ⁸⁾	辛 微温		辛 温	乾薑以母薑造之。今江西襄均皆造, 以白淨結實者為良, 故人呼為白薑, 又曰均薑		
	1612 本草原始 ⁵⁸⁾	辛 微温		辛 温	漢州白乾薑。白淨結實。俗呼為均薑。入藥最良		
	1647 本草乘雅半偈 ⁵⁴⁾			辛 温	乾生薑乾薑者即所取薑種水淹三日去皮置流水中漂浸六日更刮去皮然後晒乾入瓷缸中醃三日乃成以白淨結實者為良故人呼為白薑入藥則宜炮用		
清 清初	本草崇原 ⁵⁹⁾			辛 温	乾薑用母薑晒乾以肉厚白淨結實明亮如天麻者為良故又名白薑		
	1664 本草述 ⁵⁴⁾	辛 微温		辛 温	造乾薑法取生者水淹三日去皮置流水中六日更刮去皮曬乾置磁甕中醃三日紫色乃成		
	1666 本草匯 ⁵²⁾	辛 温		苦辛 大熱	江西所造水浸三日去皮浸六日。更刮去皮。晒乾置瓷缸中。醃三日。始成薑皮作散		
	1681 本草詳節 ⁵⁹⁾	辛 微温		辛 温	以白淨結實母薑晒乾為之		
	1696 山居本草 ⁵²⁾	辛 温		苦辛 大熱	一名白薑。以母薑洗淨。晒乾置釜缸中。醃三日乃成。以白淨結實者良		
	1753 長沙藥解 ⁵²⁾	辛 温		辛 温			
	1757 本草從新 ⁵⁴⁾	辛 温		辛 熱	母薑曬乾為乾薑白淨結實者良		辛苦 大熱
	1758 医林纂要探源 ⁵⁹⁾	辛 温		辛 熱		辛苦 大熱	辛苦 温
	1769 本草求真 ⁵⁴⁾	辛 微温		辛 大熱	母姜晒乾為乾姜	苦 大熱	
	1773 要藥分劑 ⁵⁷⁾	辛 微温		辛 大熱			
	1789 羅氏會約医鏡 ⁵⁹⁾	辛 熱		辛 温		辛苦 大熱	
	1790 本草輯要 ⁵⁷⁾	辛 温		辛 温	母薑晒乾者為乾薑	辛苦 大熱	
	1812 藥籠小品 ⁵⁴⁾	辛 温		辛 熱		辛苦 大熱	
	1815 本草纂要 ⁵⁷⁾	辛 温		辛 熱		甘 温	
	1827 類經證治 ⁵²⁾	辛 温		苦辛 大温	取母姜晒干為干姜燒黑為黒姜		
	1828 本草正義 ⁵²⁾	辛 熱		辛 熱			
	1829 本草述錄 ⁵⁴⁾	辛 微温		辛 温		苦 大熱	
	1837 本草 ⁵⁷⁾	辛 温		辛微 苦 温熱			
	1862 本草害利 ⁵⁴⁾	辛 温		大辛 温	晒乾, 姜白結實者良		
	1885 本草綱目易知錄 ⁵⁴⁾	辛 温		辛 温			
	1887 本草簡明圖說 ⁵⁷⁾	辛 温		辛 温			
	1897 本草撮要類編 ⁵⁴⁾	辛 温		辛 熱	老薑晒乾為乾薑		辛苦 大熱
	1904 本草思辨錄 ⁵⁴⁾				乾薑以母薑去皮依法造之		

表3 日本の本草書中の生姜および乾生姜に関する記載内容

年代	文献名	生姜	乾生姜
1623	和名集并異名製剤記 ⁵⁷⁾		生ナルハシカミヲ其ノママ日ニホシタルヲ云フ
1631	新添修治纂要 ⁵²⁾		乾生姜トハナマ生姜ヲホシタル也
1669	新編靈宝薬性能毒 ⁵⁴⁾		乾生姜トハ唯干[タダホシ]タル姜[ハジカミ]也干姜ニ代用ス
1687	食用簡便 ⁵⁴⁾		干姜[ホシシヤウガ] 切片テ日ニ乾シ用ユ主治禁好生姜ト同シ
1698	広益本草大成 ⁵⁶⁾		生姜ヲ切片[キリヘギ]テ陰乾[カゲホシ]スル者也 薛巳ガ方書ニ謂所ノ乾姜ハ多ハ眞乾姜ニ非ズ。乾生姜ヲ以テ云
1715	合類広益靈宝薬性能毒大成 ⁹⁾		乾生姜トハ只[タダ]干[ホシ]タル姜[ハジカミ]ナリ干姜ニ代[カヘ]テ用ユ
1723	六八本草 ⁵⁴⁾	生姜ハ常ニ用ル生[ナマ]ノ生姜ナリ	干生姜ハ生姜ヲ秋冬ノ内ニ其マカハカシタルモノナリ
1723	本草製譜 ⁵²⁾		乾生姜ハ母姜ヲ以テ皮去日乾用
1726-1776	用薬須知 ¹⁰⁾		乾生姜ハ生姜ヲキザミソノママ日乾シテ收メ用ルナリ俗医多ク此ヲ以乾姜ト為ルハ誤ナリ
1729-1810	本草綱目訳説 ⁵³⁾		法ノ如製ス只乾スモノハ生干ニテ乾生姜ト云流水ニ不浸只切テ乾生姜ト云日本ニテハ生干シト云
1818-1829	本草古義 ⁵⁷⁾		秋冬之際採老根以少洗過去皮切尾日乾即今云乾生薑
1893	和漢薬考 ¹¹⁾	漢医ガ方書中ニ生薑ト記スルモノハ生[ナマ]ノしやうガナレドモ、日本薬局方ニ掲載スル生薑ハしやうガノ日干シタルモノニシテ漢医ノ所謂乾生薑ナリ	薑ヲ採掘シ水洗ン皮ヲ剥去シ其儘乾燥シタルモノナリ
1918	和漢薬物学 ¹²⁾	本品は多年生草本たる生薑[シヤウガ](Zin. officinale, Roscoe.)の根(根茎)なり	

点が多い。なお、単に乾燥させたショウガ根茎を「乾生姜」と呼ぶことがあり、本稿ではこの用語を使用した。

本研究では、中国および日本の本草書、医方書の記載内容から、生姜ならびに乾姜の歴代の調製法を調査し、両生薬の来歴を明らかにすると同時に、中国と日本で生薬名が異なる理由を考証した。

1 生姜の調製法の歴史的変遷

(1) 中国

後漢代に書かれた医方書である『傷寒論』³⁾中の桂枝湯などの生姜配合処方には、生姜に「切」の加工を施すように規定されている。「切」は刃物で切ることを意味していると考えられ、新鮮品は刃物で切れることから、生姜として乾燥品ではなく新鮮品を用いたと推察できる。なお、同書では「切」を施すのは生姜のみであり、生姜は他の生薬とは異なり新鮮品を使用していたことが裏付けられる。時代が下り、『図経本草』⁴⁾ (1062) に、「生姜是常食物」、『本草蒙筌』⁷⁾ (1565) に「常得新鮮」とあり、後漢以降、新鮮根茎を生姜として用いたことがわかる(表2)。

(2) 日本

『六八本草』⁵⁴⁾ (1723) に「生姜ハ…生ノ生姜ナリ」とあり、日本でも新鮮根茎を生姜として用いていたことがわかる。一方、『和漢薬考』¹¹⁾ (1893) に「漢医ガ方書中ニ生薑ト記スルモノハ生ノしやうガナレドモ、日本薬局方ニ掲載スル生薑ハしやうガノ日干シタルモノニシテ漢医ノ所謂乾生薑ナリ」とある(表3)。また、『改正日本薬局方』¹³⁾ (1891) には薑根の名で生姜が収載されており、「本品ハ通常長片ニ截リ乾燥ス」とある。すなわち、明治時代に生姜を日本薬局方に収載する時には、乾生姜を採用したが、漢方医は新鮮根茎を用いていたことがわかる。

2 乾姜の調製法の歴史的変遷

(1) 中国(表2)

乾姜の名は馬王堆出土の前漢代の医書である『五十二病方』¹⁴⁾、『養生方』¹⁴⁾および『雜療方』¹⁴⁾に既に見られ、加えて『五十二病方』¹⁴⁾には「枯姜(原文は薑)」の名もあり、ショウガ根茎を加工して用いていたことが窺われる。一方、これらの文献には生姜の名は見られず、「姜(薑、薑などの文字を使用)」と記されている。これらのことから、「姜」は

表4 日本の本草書中の乾姜に関する記載内容

年代	文献名	流水に浸して調製	流水に浸した後、醗して調製	煮製(*は蒸製)	石灰を用いたもの
1562	本草異名記 ⁵⁹⁾	九月十月二生姜ヲツツ井花水ニ浸スコト三日シテ皮ヲケツリ去テ又流水ニ六日浸ス。毎日水ヲカエテサテ日ニ乾シ焙リ用ユ			
1623	和名集并異名製剤記 ⁵⁹⁾	生薑ヲ九月十月二探テ井花水ニ三日浸シ上皮ヲ削リ去テ又二六日ヒタシ毎日水ヲカエル也サテ日ニホシ			薬屋ニ売ハ蒸シ石灰ニマフシ置クナリ
1631	新添修治纂要 ⁵⁾	生姜ヲ寒ノ中ノ水ニ浸事一七日シテ皮ヲ去リ日ニ乾シ剉ミ焙フル			
1579-1657	宣子製剤記 ⁵⁹⁾	入門私日取生者能皮ヲケツリ去寒ノ中流水ニ浸コト七日ニシテ取上ケ日乾セハ色白シキサミ焙ル	本草可見取生者水ニ淹スコト三日去皮置流水中六日更去皮晒干醗磁瓮中三日ニシテ紫色ニシテ乃成		石灰ヲスリ白クスルハ非ナリ
1669	新編靈宝薬性能毒 ⁵⁴⁾	生姜ヲ寒ノ中三七日水ニ浸シ皮ヲ去リ日ニ晒テ剉ミ焙ル			
1680	図解本草 ¹⁶⁾		母薑ヲ以テ之ヲ造ル 水ニ淹[ヒタスコト]三日、去ヲ皮リ、流水ノ中ニ六日 更ニ皮ヲ刮[ケズリ]去リ 然シテ後チ曝シ乾シ瓷缸ノ中ニ置醗スルコト三日乃チ成ル白淨結實ノ者ヲ以テ良ト為 故ニ人呼テ白薑ト為 又タ均薑ト曰		今ニ廣嶋ヨリ出ハ者ノ石灰ノ氣多シ
1689	炮炙全書 ⁵⁴⁾		造乾薑法 母薑ヲ以水ニ浸スコト三日皮ヲ去又流水ノ中ニ置コト六日更皮ヲ刮リ去テ然後晒乾シ瓷缸ノ中ニ置テ醗スルコト三日乃成ル也。	薬肆中母薑ヲ以テ略ク煮過シテ然後之ヲ暴シテ乾サ令之ヲ乾薑ト名テ售ル是ニ非	
1698	広益本草大成 ⁵⁾		母姜ノ腐不者ヲ擇水浸コト三日シテ薄皮ヲ去。又冷水ニ浸スコト六日或ハ三日モ亦タ可也。取出テ又外皮一片ヲ刮去テ日晒シ乾磁器ニ蔵置コト三日メ用ユ	今薬店ニ母姜ヲ煮過テ晒シ乾シ此ヲ號テ乾姜トス。甚ダ非也	
1723	六八本草 ⁵⁴⁾		乾姜ハ綱目時珍ガ製法ヨシ又寒ノ内ニ生姜ヲ三日ホド水ニツケ水ヨリアゲ釜ヲオホヒ一ホド寐サセテ日ニ干シ晒シ用ル。		今薬肆ニ売ル所ノ乾姜ハ生姜ヲ蒸シテ石灰ヲマズシタルモノナリ用ユ可不。
1723	本草製譜 ⁵¹⁾		乾姜造法母姜ヲ以テ水ニ浸スコト三日取出シ皮ヲ去又流水ノ中ニ置コト六日晒テ壺中ニ入(蜜)ニ口封醗コト七日乃成	按業者之有者母姜ヲ以煮過	或蒸石灰ニ拌セ晒テ乾姜ト名ケ偽売用可不
1726-1776	用薬須知 ¹⁰⁾		長流水ニヒタシ製ス		薬家多ク乾生姜其色ノ之白カラキヲ欲シテ石灰ヲ以テ纏[マフ]シ収メテ之ヲ売ル毒有リ
1729	一本堂薬選 ¹⁷⁾				薬舖作所、…沸湯ノ中ニ拔シ、煮過ステ霎時、日ニ乾シ、石灰ヲ用テ之ヲ粉シ
1734	薬籠本草 ¹⁸⁾		弘景ノ曰乾薑ヲ作ノ法水淹コト三日皮ヲ去流水ノ中ニ置コト六日晒乾瓷缸ノ中ニ置醗スルコト三日乃成		本邦売薬家ノ製法…皮ヲ去不之ヲ蒸 而後石灰ニ拌晒乾其味辛裂不
1756	本草雋 ⁵⁰⁾		母姜ヲ以水ニ浸コト三日皮去又流水ノ中置六日更皮刮去リ然後晒シ乾瓷缸ノ中ニ置醗コト三日乃成也	薬肆中母姜ヲ以暑煮過然後之ヲ曝今乾名テ之ヲ乾姜ト售ル	或ハ其ノ色白ヲ欲シ石灰以纏収者有。毒有俱ニ是非
1778	千金方薬註 ⁵⁷⁾		綱目ニ流水ニ浸シ器ニ入レ蓋ヒ宿ヲ經テ紫色ニ変ズ是レー法ナリ		参河乾姜ハ石灰ヲ以テ製ス毒アリ
1729-1810	本草綱目訳説 ⁵⁾	乾姜製法ハ生姜宿根ヲ采リ流水ノ中ニ二七日許リ浸シテ製ス			薬舖ニ此ヲ偽リ生干ニ石灰ヲマブシ白メ售ル用ニ堪不
1803	本草綱目啓蒙 ¹⁹⁾		乾薑ハ長流ニ数日浸シ醗シ晒スコト集解ニ詳ナリ自製ヲ良トス		其色ノ白カラシコト欲シ石灰ヲ收雜ユル者アリ宜シ洗ヒ去テ用ユベシ
1818-1829	本草古義 ⁵⁷⁾				今薬肆…然欲色白石灰拌乾故不堪入薬宜自製
1841	古方薬品考 ²⁰⁾		造法秋冬ノ交[アイタ]老薑ノ肥タル者ヲ取テ水ニ淹シ洗ヒ過シ。晴ヲ待テ皮ヲ刮リ或ハ之ヲ片キ日ニ曝ス若クハ乾キ難キガ則チ干甞器[ヤキモノ]内ニ燻[イル]亦可ニ		
1893	和漢薬考 ¹¹⁾	生薑ヲ寒中三七日間水中ニ浸漬シ皮ヲ除去シ日干シ		地下茎ヲ蒸シテ乾干スル ^{*)}	八九月頃ニ地下茎ヲ採掘シ水洗シテ水中ニ石灰ヲ混和シタル中ニ入レ煮沸シ日乾シ
1918	和漢薬物学 ¹²⁾			本品の蒸熱したるものを乾薑と云ふ ^{*)}	

新鮮品と乾燥品の区別がないショウガ根茎を指し、特に「乾（乾燥）」や「枯（水が乾きひからびる状態）」に加工する必要がある場合は「乾姜」、「枯姜」と区別したと推察できる。

本草書では『神農本草経』（後漢）に初収載され、辛温の薬能をもつ薬物とされたが、『名医別録』（後漢）では性味が大熱と記載された⁴⁾。大熱は附子に代表される性味であり、乾姜は非常に熱性が強い薬物であることが窺われる。また、『神農本草経』には「生者尤良」とある。この記述は同書の乾地黄の項目にも見られ⁴⁾、乾燥品の中で特に新鮮品を指していると考えられる。すなわち、乾姜の中に新鮮なショウガも包括していたと推察できる。なお、同書の乾姜の薬能に関する記述は新鮮品と乾燥品の2種を指していると考えられている¹⁵⁾。一方、『神農本草経集注』⁵⁷⁾（5世紀末）には「水淹に3日浸し、皮を去り、流水中に3日おき、更に皮をむき、日干しする。その後陶磁器内で醸して得る。（水淹三日畢 去皮置流水中六日 更去皮 然後晒干置瓮缸中 谓之醸也）」とあり、乾姜の調製法が初見した。本書には温と大熱の2種の性が記載されており、上記の調製法にて製した乾姜はいずれかの薬性をもつと考えられる。宋代の『図経本草』⁴⁾（1062）には「漢州乾姜法」と「温州白乾姜」の2種が記載された。前者は『神農本草経集注』⁵⁷⁾に記載の方法と同様であるが、後者は「米のとぎ汁で煮る（一物漿水煮）」とあり、地域により調製法が全く異なっている。なお、漢州は四川成都府、温州は浙江永嘉県に位置する。

時代が下り、明代の『本草蒙筌』⁷⁾（1565）には、「去皮日曝、又名乾姜」とあり、乾生姜も乾姜の一種として扱われ始めたことがわかる。また、『本草崇原』⁵⁷⁾（清初）には「乾薑用母薑晒乾」とあり、乾姜は乾生姜であると断定しており、本書では性は温としか記載されていない。清代初期には、流水に浸す調製法も記載されていたが、清代の中期には『本草從新』⁵⁷⁾（1757）、『本草求真』⁵⁷⁾（1769）などに「母薑曬乾為乾薑」とあり乾生姜の記載に代わった。清代の本草書では、薬性は『要薬分剂』⁵⁷⁾（1773）を除き、温、大温、熱と記載され、大熱の記載はない。また、『本草從新』⁵⁷⁾（1757）では黒姜、『医林纂要探源』⁵⁷⁾（1758）では炮姜の性味が辛苦、大熱と示された。すなわち、清代中期の乾姜は温性の乾

生姜であり、修治により炮姜や黒姜とすることで大熱の薬性に変化するとされた。一方、齊代以後は地域により調製法が異なっており、流水に浸して製す乾姜は大熱の薬性を示したと考えられる。

良品に関する記載として、李時珍は『本草綱目』⁸⁾（1596）中で「白淨結実者為良」と述べ、白くきれいなものが良いとし、この記載が後世に伝承された。

（2）日本（表3、表4）

日本では、『古事記』（712）に「垣もとに植えし薑」とあり、平安時代に既にショウガが栽培されていたとされる²¹⁾。また、『尺素往来』²²⁾（1481）の薬種の項目に「人参…桂心、甘草、川芎、当帰などは新たに渡来した済物であるが、山薬、牛膝、牽牛子、…乾姜などは和薬であり、御所にあるので献ずるに及ばず（人参…桂心、甘草、川芎、当帰…皆新渡之済物候。山薬、牛膝、牽牛子、…乾姜…等之和薬者。御所持之間不及献之）」とあり、乾姜は中国からの輸入品に依存せず、古来、日本独自に調製してきたことが窺われる。

乾姜の調製法として、曲直瀬道三著の『本草異名記』⁵⁷⁾（1562）に、「九月十月二生姜ヲトッテ井花水ニ浸スコト三日シテ皮ヲケヅリ去テ又流水ニ六日浸ス。毎日水ヲカエテサテ日ニ乾シ焙り用ユ」とあり、漢州乾姜の調製法に類似するが、陶磁器内で醸す過程がない。本法は、『和名集并異名製剂記』⁵⁷⁾（1623）、『宣子製剂記』⁵⁷⁾（1579－1657）など曲直瀬道三の門下による書物にも記載されている。また、『宣子製剂記』⁵⁷⁾には、「本草可見取生者水ニ淹スコト三日去皮置流水中六日更去皮晒干醸磁瓮中三日ニシテ紫色ニシテ乃成蜀地ノ者佳」とあり、漢州乾姜の調製法も日本に取り入れられた。

一方、『和名集并異名製剂記』⁵⁷⁾に「薬屋ニ売ハ蒸シ石灰ニマフシ置クナリ其ハ熱湯ニ浸シ上ノ皮ト石灰トヲ削リ去テ紙ニ包ミ水ニテヌラシ熱灰ニテ炮シキサミ炙テ使フ」とあり、薬屋には蒸した後に石灰をまぶして調製したものが売られていたようだ。また、『農業全書』²³⁾（1697）の薬種（乾薑）の項目に「生姜のよく肥実したるを、十一月のころざつと湯煮して、石灰に和し、よくほしあげ、薬屋にうるべし」、薑（はじかみ）の項目に「淨く洗ひざつと湯煮して、かき灰にまぜ乾し上て簞などにもりをきて、薬屋にうるべし」とあり、かき灰（かまどの灰）および石灰を乾燥剤として利用していたことが窺われ

表5 三河乾姜に関する記載内容

年代	文献名	記載内容
1771	薬徴 ⁵⁷⁾	本邦之産、有二品。曰乾生姜、曰三河乾姜。所謂乾生姜者、余家用之。所謂三河乾姜者、余家不用之
1778	千金方薬註 ⁵⁷⁾	参河乾姜ハ石灰ヲ以テ製ス毒アリ
1729-1810	本草綱目訳説 ⁵³⁾	三河ニテ製スルモノ良シ。今薬肆ニ三河乾姜ト云モノハ真ノ三河ニ非ス偽物也
1803	本草綱目啓蒙 ¹⁹⁾	薬舗ニテ三河ヨリ出ル者ヲ上トス形全キ者アリ片ナル者(ヘギ乾薑ト云)アリ三河乾薑ト呼ブ
1841	古方薬品考 ²⁰⁾	三河乾薑。形瘠小ニシテ外白ク肉赤ク錫ノ如ニシテ堅ク辛味厚カラ不者ヲ次ト為。三州遠州及ヒ東南州群之ヲ出ス

る。しかし、『用薬須知』¹⁰⁾ (1726-1776) に「其色ノ之白カラキヲ欲シテ石灰ヲ以テ纏シ収メテ之ヲ売ル毒有リ灰氣ヲ洗去テ之用ユ可」とあり、石灰を用いる理由は色を白く見せるためだとされる。これは、『本草綱目』⁸⁾ に白いものが良品であると李時珍が記したことに起因しているものと思われる。

さらに、『炮炙全書』⁵⁴⁾ (1689) に「母薑ヲ以テ略ク煮過シテ然後之ヲ暴シテ乾サ令之ヲ乾薑ト名テ售ル是ニ非」とあり、薬屋にはショウガを煮て調製したのも乾姜として売られていたことがわかる。

明治時代になると、『和漢薬考』¹¹⁾ (1893) に「地下茎ヲ蒸シテ乾干スル」とあり、現代の日本薬局方で規定されている方法が初めて記された。また、同書に「地下茎ヲ採掘シ水洗シテ水中ニ石灰ヲ混和シタル中ニ入レ煮沸シ日乾シ」ともあり、石灰を用いた調製も一部では行なわれていたと考えられる。一方、大正時代になり『和漢薬物学』¹²⁾ には「本品の蒸熱したるものを乾薑と云ふ」とあり、蒸製法のみとなった。

以上、江戸時代には、乾姜には大きくわけて、漢州乾姜法、漢州乾姜法の醸す過程のないもの、蒸製後に石灰をまぶす、煮て調製の4種の調製法があったが、明治時代には現在と同様の蒸製法が規定され、大正時代にはそれに統一されたことが明らかになった。

(3) 日本における「乾姜」と「干姜」の差異

江戸時代には「乾姜」と共に「干姜」の文字も存在しており、それぞれ異なるものを指すことが明らかになった。すなわち、「乾姜」は前述の4種の調製法にて得られたものであるが、『食用簡便』⁵⁴⁾

(1687) に「干姜 [ホシシヤウガ] 切片テ日ニ乾シ用ユ」、『合類広益靈宝薬性能毒大成』⁹⁾ (1715) に「乾生姜トハ只干タル姜ナリ干姜ニ代テ用ユ」とあり、

「干姜」は乾燥ショウガすなわち乾生姜を意味する。このことから、中国での乾姜は乾生姜を指していたと判断できる。さらに、『用薬須知』¹⁰⁾ に「乾生姜ハ生姜ヲキザミソノママ日乾シテ収メ用ルナリ俗医多ク此ヲ以乾姜ト為ルハ誤ナリ」とあり、日本では乾生姜を乾姜として用いるのは間違っていると述べられ、両国での乾姜が異なるものと認識されていたことが窺える。

(4) 三河乾姜に関する記載内容 (表5)

江戸時代には「三河乾姜」と呼ばれるものが存在し、『本草綱目訳説』⁵³⁾ (1729-1810) に「三河ニテ製スルモノ良シ」、『本草綱目啓蒙』¹⁹⁾ (1803) に「薬舗ニテ三河ヨリ出ル者ヲ上トス」とあり、三河すなわち現在の愛知県の東部で製す乾姜は良品であるとされる。その性状は『古方薬品考』²⁰⁾ (1841) に「小さく、外面が白色で肉が赤く飴のように堅く、味は辛い(形瘠小ニシテ外白ク肉赤ク錫ノ如ニシテ堅ク辛味)」とある。『千金方薬註』(1778)⁵⁷⁾ には「参河乾姜ハ石灰ヲ以テ製ス毒アリ」とあるが、石灰を用いたとあるのは調査した中で本書のみであり、確証はない。一方、『本草綱目訳説』⁵³⁾ に「今薬肆ニ三河乾姜ト云モノハ真ノ三河ニ非ス偽物也」とあり、三河乾姜の偽物も出回っていたことがわかる。

考察および結論

1. 乾姜は本草書では『神農本草経』(後漢)に初収載され、辛温の薬性をもつ薬物とされたが、『名医別録』(後漢)では性が大熱と記載された⁴⁾。一方、生姜は『名医別録』に初収載され、辛微温の薬物とされた。すなわち、乾姜は生姜よりも温性が強い薬物だと判るが、『神農本草経』の温と『名医別録』の大熱では熱性が大きく異なり、別のものを示している可能性が考えられる。また、『神農本草経』では新鮮根茎も乾姜に包括していたと判断できる。乾

生姜は温性、梁代から調製法が明記された漢州乾姜は大熱であることが明らかになったことから、『神農本草經』では生姜と乾姜の区別がなく、単に乾燥した根茎または新鮮根茎を「乾姜」の名で収載し、『名医別録』では新鮮根茎を生姜、水に浸した後に陶磁器内で醸した漢州乾姜を乾姜として収載したと考えれば薬効の差も説明がつく。

2. 馬王堆出土の前漢の医書および『神農本草經』（後漢）では新鮮なショウガ根茎を乾燥品とは区別してなく、『傷寒論』（後漢）では新鮮根茎を生姜としていたことが明らかになった。また、前述の『名医別録』は医家の張仲景や華佗の所記があるとされるが²⁴⁾、この書でも新鮮根茎を生姜としていたと考察できた。すなわち、後漢代の医家が「生姜」と「乾姜」を区別したと推察できる。

3. 中国では後漢末期以降、日本では少なくとも江戸時代以降、新鮮根茎を生姜としてきたことが明らかになった。しかし、日本では明治時代に日本薬局方に生姜を収載する際に、乾燥根茎を採用し、現在に至っていると考察された。日本薬局方はオランダ薬局方を主軸とした欧米の薬局方を参考にしており、漢方医学ではなく西洋医学を重視している。そのため、漢方医学のようにショウガの新鮮品と乾燥品を区別する必要はなく、保存に適した乾燥品を一種の薬品として収載した可能性も考えられる。

4. 後漢から清代初期の本草書における乾姜の薬性は、「温」と「大熱」の2種が存在したが、この違いは修治法の違いによるものと考えられる。すなわち、温は乾生姜、大熱は水に浸した後に陶磁器内で醸した漢州乾姜を指すと判断できる。しかし、『神農本草經集注』⁵⁷⁾、『本草蒙筌』⁷⁾などには修治法は1種類しか書かれていない。これは、正しい修治を行なうと「大熱」の乾姜が得られるが、実際には単に乾燥させただけのものもあったため「温」も併記したと推測できる。

清代中期には「温」のみとなり、乾姜は単に乾燥させた根茎に統一されたと判断できる。それに伴い、乾生姜を火熱して大熱性の炮姜、黒姜に修治し、漢州乾姜に代わるものとしていたと考察できる。

5. 日本では、ショウガ根茎を乾燥させるためにかき灰（かまどの灰）および石灰を利用していたと考えられるが、『用薬須知』¹⁰⁾には白く見せるために石灰を用いたとあり、矛盾が生じる。これは、乾姜

に石灰を用いた調製法が初めて『和名集并異名製劑記』⁵⁷⁾に記載された1623年から、『用薬須知』¹⁰⁾が発行された1726–1776年までの時代背景が影響している可能性がある。これに関連する事例として、『本草辨疑』⁵²⁾（1681）に「洛下の薬舗遠藤元理は、…遂に法製して、人の求めに応ず、世に成薬店の始めとす」とあり、本書発行前後で成薬店ができ、医師以外の人が生薬を修治するようになったことが挙げられる。その後、効能ではなく外見を重視した加工を施し、1700年頃には桔梗を煎茶で染め、人参と称して売りさばくなど、薬舗では偽薬が多く販売されていた²⁵⁾。一方、乾姜の良品については、李時珍が『本草綱目』で「白色の乾姜が良い」と述べたが、これは1637年に発行された日本初の『本草綱目』の刊本²⁴⁾で一般に広まったと考えられる。これを受けて、薬舗では石灰で白くした乾姜を販売し、本来乾燥剤として使用してきたものの使用目的が変化したと考察できる。

6. 生薬の真偽について書いた『本草辨疑』⁵²⁾では乾姜には偽物がないととらえていたが、『本草綱目訳説』⁵³⁾（1729–1810）には「薬舗ニ此ヲ偽り生干ニ石灰ヲマブシ白メ售ル用ニ堪不」とあり、石灰をまぶしたものは偽物としている。このことから、石灰を用いた乾姜の良否が変化したと推察できる。

7. 日本では、平安時代には既にショウガが栽培されており、室町時代には乾姜も独自に調製していたとされる。しかし、ショウガ根茎は乾燥し難いため、何らかの工夫が必要である。そこで、経験的にかまどの灰を用いて乾燥させ、後に石灰を用いたと考察できる。この石灰で乾燥させる方法は中国の本草書には見られない。一方、スリランカの市場には白い粉をまぶしたショウガ根茎が流通している²⁶⁾。このことから、日本で石灰を用い始めたのは、中国医学ではなくインド伝統医学「アーユルヴェーダ」の影響を受けた可能性も考えられる。

8. 江戸時代の乾姜の調製法には「蒸して石灰をまぶしたもの」の他に曲直瀬道三門下が伝授した「漢州乾姜に類似するが醸す過程のないもの」、「漢州乾姜法にて調製したもの」および「煮て調製したもの」が存在したことが明らかになった。この内、漢州乾姜法に類似したものは中国の影響を受けているが、日本古来の蒸製法は明治時代まで継続したと考えられる。しかし、江戸中期の偽薬問題で石灰が有

毒だと判断され、石灰を用いなくなったと考察できる。

9. 江戸時代には、中国の「乾姜」であるショウガの乾燥根茎を、日本では「干姜」の名で呼び、日本の「乾姜」とは区別していたことから、両国における「乾姜」は全く異なるものと認識されていたと判断できる。

なお、中国では1964年に、「乾」は簡体字の「干」に代わったが、日本では、1600年代に既に「干姜」と呼ばれるものが存在していた。

10. 『古方薬品考』²⁰⁾ (1841) には良品とされた三河乾姜の性状として「小さく、外面が白色で肉が赤く飴のように堅い」とあるが、内部が飴のように堅いのは、加熱処理によるデンプンの糊化によるものと思われる。しかし、加熱処理を施すと外面も赤みを帯びるため、白色であるのは別の調製を施していると考えられる。石灰を用いた可能性もあるが、これについての記述は今回調査した文献の中で1種のみであるため、確証はできない。このように三河乾姜の調製法が不明確であるため薬舗では偽物も出回っていたと考える。

11. 中国および日本では、「乾姜」と呼ばれるものが数種存在し、特に大熱性の漢州乾姜と温性の乾生姜では薬効が異なることが予想できる。今後、これらの薬効の違いについて化学的に検討する必要がある。

引用文献および注釈

- 1) 第16改正日本薬局方, 厚生労働省 HP, <http://jpd.b.nihs.go.jp/jp16/>
- 2) 国家薬典委員会編: 中華人民共和国薬典2005年版一部, 化学工業出版社, 北京, 17-18, 2005
- 3) 劉渡舟, 姜元安, 生島忍: 現代語訳宋本傷寒論, 東洋学術出版社, 千葉, 2000
- 4) 唐慎微: 經史証類大觀本草 (1108), 木村康一編, 東京, 廣川書店, 205-206, 1970
- 5) 中国文化研究会編纂: 中国本草全書, 華夏出版社, 北京, 1999; ア) 陶弘景: 本草經集注 (500前後), 5, 148-149, イ) 胡仕可: 本草歌括 (1295), 83, 367, ウ) 薛己: 本草約言 (1520), 26, 214-216, エ) 皇甫嵩: 本草發明 (1578), 56, 447-449, オ) 梅得春: 新鐫藥性會元 (1595), 76, 481-482, カ) 李中立: 本草原始 (1612), 62, 282-284, キ) 盧之頤: 本草乘雅半偈 (1647), 75, 345, ク) 張志聰注釈: 本草崇原 (清初), 95, 429-430, ケ) 劉若金: 本草述 (1664), 91, 22-29, コ) 郭佩蘭: 本草匯 (1666), 86, 161-163, サ) 閔鍼: 本草詳節 (1681), 92, 396-398, シ) 程履新: 山居本草 (1696), 99, 178-183, ス) 黃元御: 長沙藥解 (1753), 102, 460-464, セ) 吳儀洛: 本草從新 (1757), 109, 197-199, ソ) 汪紱: 醫林纂要探源 (1758), 103, 400-401, タ) 黃宮綉: 本草求真 (1769), 125, 163-164, 226-227, チ) 沈金鰲: 要藥分劑 (1773), 105, 408-409, ツ) 羅國綱: 羅氏會約醫鏡 (1789), 109, 465-466, テ) 林玉友: 本草輯要 (1790), 113, 338-339, ト) 黃凱鈞: 藥籠小品 (1812), 118, 123, ナ) 王龍: 本草纂要, 119, 62-63, ニ) 吳綱: 類經證治 (1827), 119, 216, 267, ヌ) 張德裕: 本草正義 (1828), 117, 498, 535, ネ) 張裕録: 本草述録 (1829), 114, 518-519, ノ) 王世鍾: 本草 (1837), 120, 388-389, ハ) 凌奐: 本草害利 (1862), 144, 378-379, 383, 419, ヒ) 載葆元: 本草綱目易知録 (1885), 142, 199-202, フ) 高硯五: 本草簡明圖說 (1887), 143, 426, ヘ) 王象晋: 本草撮要類編 (1897), 147, 416-417, ホ) 周巖: 本草思辨録 (1904), 145, 459-465, マ) 梅寿: 和名集并異名製劑記 (1623), 312, 24, ミ) 梅寿: 新添修治纂要 (1631), 312, 119, ム) 撰者佚名: 新編靈寶藥性能毒 (1669), 312, 488-489, メ) 蘆川桂洲: 食用簡便 (1687), 316, 18, モ) 撰者佚名: 広益本草大成 (1701), 316, 506-507, ヤ) 加藤謙斎: 増補片玉六八本草 (1723), 320, 436-437, ユ) 井上玄軾: 本草製譜 (1723), 321, 144-145, ヨ) 小野蘭山: 本草綱目訳説 (1729-1810), 336, 515, ラ) 岡村尚謙: 本草古義 (1818-1829), 341, 59-60, リ) 曲直瀬道三: 本草異名記 (1562), 355, 401, ル) 古林見宣: 増補宣子製劑記 (1579-1657), 353, 106, 119, レ) 稲生若水: 炮炙全書 (1689), 314, 515, ロ) 平住専庵: 本草雋 (1756), 321, 370-373, ワ) 松岡典: 千金方藥註 (1778), 329, 200, ヲ) 吉益東洞: 藥徵 (1771), 327, 503-506, シ) 遠藤元理撰: 本草辨疑 (1681), 313, 470
- 6) 王好古撰: 湯液本草 (1248), 人民衛生出版社, 北京, 161-163, 1987
- 7) 陳嘉謨: 本草蒙筌 (1565), 人民衛生出版社, 北京, 290-292, 1988
- 8) 李時珍: 本草綱目 (1596), 校点本, 人民衛生出版社, 北京, 第二冊, 849-852, 1977
- 9) 三村玄碩: 合類広益靈寶藥性能毒大成 (1715), ホノミ漢方薬学叢書, 巻15, 生姜, 119-120, 1987
- 10) 松岡玄達: 用藥須知 (1726), 難波恒雄編集, 漢方文献刊行会, 大阪, 54-56, 1972
- 11) 小泉榮次郎: 和漢薬考 (1893), 大耀社, 東京, 418-429, 1972
- 12) 日野五七郎, 一色直太郎: 和漢薬物学 (1918), ホノミ漢方薬学叢書, 巻15, 生姜, 175, 1987
- 13) 改正日本薬局方 (1891), 図書出版, 国立国会図書館近代デジタルライブラリー, <http://kindai.ndl.go.jp/>
- 14) 馬繼興: 馬王堆古医書考釈, 湖南科学技術出版社, 湖南, 1992
- 15) 玄振玉, 劉明嶺: 干姜, 生姜薬用源流考辨, 上海中医藥雜誌, 37(2), 48-50, 2003

- 16) 下津元知：図解本草（1680），難波恒雄編集，大阪漢方医学研究所，大阪，64-65，1981
- 17) 香川修庵：一本堂薬選（1729），難波恒雄編集，漢方文献刊行会，大阪，71-73，1976
- 18) 香月牛山：薬籠本草（1734），難波恒雄編集，漢方文献刊行会，大阪，401-408，1974
- 19) 小野蘭山：本草綱目啓蒙（1803），杉本つとむ編著，早稲田大学出版部，東京，348-349，1974
- 20) 内藤蕉園：古方薬品考（1841），燎原，東京，37-40，1974
- 21) 青葉高：野菜の日本史，八坂書房，東京，2000
- 22) 一条兼良撰と伝えられる：尺素往来（1440-1464），塙保己編纂，群書類従，続群書類従完成会，東京，9，512，1960
- 23) 宮崎安貞：農業全書（1697），山田龍雄編，日本農書全集，農山漁村文化協会，東京，12，291-295，13，289，1978
- 24) 岡西為人：本草概説，創元社，大阪，1977
- 25) 吉岡信：江戸の生薬屋，青蛙房，東京，1994
- 26) 筆者の御影らが2004年にスリランカに調査に行った時に確認した